



銀鈴第拾六號(每月一回二十日發行)  
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可

明治三十九年十月十日發行



第 拾 六 號

銀鈴第六拾號掲載目次

文藝雜俎(評論)……………辰巳生	春圃雜筆(雜文)……………千代延春圃
ぬれ髪(短歌)……………福田紫雲	花(短歌)……………森脇桃村
霧(短歌)……………松田きよし	滿韓の野に遊びし碧雲兄の歸郷 を祝して歌へる(長詩)……………
秋の雨(短歌)……………松本掬雨 花守乙女	……………三島溪雲
百合(俳句)……………奈倉梧月選	秋(俳句)……………千鳥子等
其日の牧(長詩)……………立田紅翠	百重波(短歌)……………しののめ會
愁思(短歌)……………菅原紅雨	水馬會(俳句)……………五吞報
花環(長詩)……………碧雲	寄贈新刊……………
蝙蝠(俳句)……………祝羽風選	控へ帳……………記
	者

銀鈴第六拾號

明治三十九年十月十日發行

文藝 雜俎 ◎帝國文學第八 高野斑山氏の室町時代の小説

の海外騒壇は必讀の價あり、然れども野村傳四氏の戀歎に至つては頗贅辭を呈し難きものとす。

◎文藝俱樂部第拾壹 江見水陸氏の鯨歌、川上眉山氏の喜劇仙臺半を掲ぐれども、浮世欄ののろけ箱は遂に發賣禁止の厄を招けり

◎趣味第三 抱月氏が「ロセツチが畫ける顔」と題して強烈な肉的生活の上に玄秘な靈的生活を加へたやうな情緒の表現であるといへるはよく肯綮に中れる言と謂ふべし。

◎早稲田文學第八 中澤畫伯が富士スケッチ七十面輕妙にして眞髓を得たり。泣菫氏が追懷、心ゆく調べなれども其想は白羊宮などに見る處と同一なり。

◎明星第八 林田春潮氏の耳鳥齋書目解題あり、耳鳥齋は江戸の才人にして而も知る者少き今日、斯る解題

を得たるはよろこぶべきことなり、加ふるに版畫數面を掲げれば斯道の研究に好箇の契なるべし。松永清亂氏が近什十首、いつもながら沈痛なる作風羨望に堪へず、評者嗜好上左の三首を摘抄す。

とまれ今わが殘虐を行はむ君をぞ思ふ心の上に  
山がらすひとこゑ森に啼くほかに餘事を語らぬさ  
びしさに居る  
たばかられ來てわが胸に青冷えしよろこびをしも  
あはれと思ふ

與謝野寛氏が長詩數篇の内「車」最もこのひてうれし  
◎明暗 火野葉舟窪田通治二氏が合著の歌集なり、左に其一斑を掲げて評に代ふ

ものすべて涙となりて吾が魂をさそふに似たり秋  
の夕は  
赤き果に渡り鳥來て悲しげに歌ふに似たる旅の思  
ひす  
今初めて心捧げて君戀ふと古き思ひを無みし言ひ  
うる(葉舟氏作)  
再黍の焦げしを嗜めば幼きかをり胸に湧きくる  
われ君をわがものならず知りてより君を戀ひぬと

打ちいて言はば

強ひて笑む我れにむかひてうらなくも笑みぬる君  
を悲しと思ひぬ

我が涙をそぎし家に知らぬ人住みてさめく春の  
夜來れば

海にむかふ小さき家や夕づく貝の灯蓋に油をさ  
しぬ(通治氏作)

◎夏目瀨石氏の新作草枕は、九月の新小説の巻頭を飾つた。この飾つたといふ外に余は史に適當の語を見出さぬ。現代大家たる夏目瀨石の四字、百四十四頁の長篇は月刊雑誌を飾るには十分だ。然り、飾り物たる以上は敢て其裏面否内容に立入つて、探究するには及ばない、若し一步入つて窺ふときは、シェレーが出る、淵明、王維が出る、芭蕉が出る、ダーナーが出る、俳句が出る、英詩が出る、漢詩が出る、はては、夏目瀨石氏自身が大手を振つて飛び出してくる。そうして夏目といふ大きな人の袖の下や肩の上か志保田の嬢様が時々顔を出して居る、是れがこの飾り物の本体だ。このやうな組立は猫や坊つやんには、良からうがローマンスとしてはいかゞであらうか、ちと反省を願ひた

。余一個の嗜好としては一樹の陰もない禿山よりもうつくしい花園の方うれしい。  
序にいふが、明星に掲げてある俗人の批評は極めて眞摯なもので同情に富んで居る。よしや、故萩の家先生が御在世になつても、あれだけ薫園氏の短所を指摘しては下さるまいと思ふ。薫園氏たるものは彼の評を以て宜しく慈母の訓とすべしだ

——以上辰巳生——

◎無限思潮七章號。教育、社會、學術、宗教、文學等何んでも八百屋的雜誌だ。余は萬縁叢中の紅一點として、與謝野寛氏の長詩「朽尼」一篇を拾ひ得た。

◎キサラギ第六 三尺氏の「空氣枕」は、多少故人綠雨氏を德ばしむるものがある。募集ものでは一の採るべき什を見出し得ぬ。

◎浮城三の十一 「子規の形式は亡びやうとも精神は亡びない。獨り子規のみではない、人丸も赤人も芭蕉も蕪村も形式に於てこそ過去にも屬すれ、其精神は生きて將來永久に活動しつゝあるのである。然るに其精神を愛する餘りに其形式をも取つて全然今日に充て籠めやうとは何等の無謀ぞ、何等の量見違ひぞ。此の如

いといふても決して無理ではあるまい。

同號に於けるケール博士のハルトマンの話、抱月氏の見聞譚、高村光雲氏の古彫刻の味等それ〴〵に趣があつてうれしい。

◎「予は高襟より印半纏を取れり」とは中村博士が其著書日本建築辭彙に序した一句、余はこの隻語に何ともいへぬ愉快を覺えた、世にはわかりきつた事を面倒臭く片假名交りに書いて學者風を装ふ者多き今日、一向博士の高見に心服する

◎滯歐文談は島村抱月氏が嘗て新小説にかゝげしものを一ト纏めにしたのが、今改めて通讀すれば「ツリ」のザレクシヨン「思想問題」など趣味津々。

◎なおりそ十五號にドオデエ作旅店、河邊青郊氏の譯述にて掲載されたが、其他に見るべきもの無しといふも過言ではあるまい、丸岡氏毛呂氏等の幸に才分を吝む無くむは可なりぞ。

◎近來明星の短詩は格調といひ用語といひ圓熟して來た事は何人も認める處であらう。それと同時に暗闇色、灰色を帯びて來たやうだ、往年の優雅のうちに痛切なる青春のねもひを歌つたものは少いやうな氣がする

くば形式と共に精神をも滅却するのである」と説ける「流れ矢」の稻青氏が有る。

◎紫陽花六の六 余は「白い齒」に於て水野葉加氏の筆の温藉を思ふ。

◎シブキ改卷號 鳴雪氏の改卷祝詞に曰く「しぶきしぶきしぶきて涼し雨と風」と。

◎山鳩三の十 石橋思案氏に「輕薄兎恥を知つて須らく文壇より退去せよ」と叫べる薇山氏の「河漢言」「姉のもとへ」と書ける湖友氏の「初月忌」二篇を推奨すると共に、虎月氏の「別れ」考樂氏の「服從論」を抹削せんことを望む。

◎さをしか第一 淺井黙語氏の「蜻蛉釣」さすがどうなぶかれる。新渡戸稻造氏の「妖怪改良の説」高安月郊氏の「高杉普作」中川霞城氏の「一句一話」高華水氏の「新刊書批評」などは一讀の價があるけれど、池邊義家氏の選歌は少々嫌らぬ。

◎五月三の九 鳥居白山氏の熱心は我等の學ぶべきものであると思ふ。

——以上、翠誠生——

ぬれ髪

福田紫雲

陰陽師つづれ袖して古寺の樓門に立つ秋の風かな

濡髪や玉藻花藻の海底にうろくづめでゝたすあえかさ

物乞のさすらひ人と肩ならべ秋の野行くに月さす夕

朝の秋うろこ雲はる大空のやゝ破れけり人のかたち

遠世にも同じ涙の君あらば昨日を泣くとなげかぬ我も

冬枯の空に似し身とひとり居て泣きぬ去年なる君よぶ日かな

秋の雨

松本掬雨

花守乙女

天上の宮居に宵の灯ともすど立つや白樺鬮する丘に

秋の雨縹の野路の桔梗は紫玉を布くとひたふしぬるも

瑠璃鏡のごとしと云ひぬもろ人は百合さく山の泉をめでて

十日月宵寝のひとの夢問ふて飛鳥のさまに吹きぬゆふかせ

白合

(募集句)

第三回発表

梧月選

白百合や下り三里の峠茶屋 梅窓

霧

松田きよし

花桐や網干す家の棟をいで夕月さしぬさすらひの日よ

神門より荒き男きたるくれ方を据風呂たてぬ白けしの花

雞頭に秋の雨ふる山寺の法音ゆるにけふも日暮れぬ

君が家夕雨ごとにきりくす蚊帳に來鳴くと忘れぬ日かな

叔母の家は町をはなれし白壁の藏に霧する河岸にして

姫百合も過ぎて菊咲く比丘尼寺

百合折て友染の袖濡しけり 峰秋  
百合の雨編笠の人裾野行く 楚様  
百合合や京に育ちし女醫者 五吞  
百合合や山寺寒き朝の月  
百合白し草に晴れ行く谷の露  
百合涼し風楚々として月出たり  
百合合に寮静なる灯かな

附記、今回は天位を設けず

追吟

温泉戻りの舟に早百合の弱りかな

懸賞俳句募集

○第五回課題(〆切十月三十一日)

△南瓜 祝羽風氏選

△秋の雨 奈倉梧月氏選

△棗 〆切十一月三十日

△蟪蛄 祝羽風氏選

△各題十句。用紙半紙。本社宛。

その日の牧

立田紅翠

卯月の空をさまよへる、  
白銀孕む流胎の  
陽は菩提樹の隠家に  
裳ひきぬ、うるむ鈍幕うちぬ。

相見そめしは葵祭の日、  
斑白小牛の幾群が、  
仄並めねぶれる牧原の、  
薫り露じむ老樟の影。

この静けさの黄昏に、  
伏穂の草は蘇り、  
胸にたりに湧く眞清水は、  
常泉の水脈にひたあふれしか。

げに清浄の顯身よ――、  
齋場淨むる初禰宜の、

眞夏日なか大焦熱の大苦難せまるがごとしあ  
あ君おもふ

かかる日のありと思せと文したる昨日をれも  
ふ不覺の戀よ

花環

滿韓旅行を了へて歸りし友の  
新婚を祝して

碧雲

一條の流れ一樹のかけ  
夕もきすりの袂にも  
縁籠るときくものを  
盛夏八月酷熱の  
黄塵雲とわくところ  
滿韓の野に手をとりて  
旅寢物うき貨車の夢  
アソベアの味を忘れめや。

酔ひごゝちなる沈黙こそ、  
れとろへ知らぬ歸依の根差ぞ。  
あゝ熱き頬はふれねども、  
玉の雙腕は捉らねども、  
二人の魂は息ざして、  
野百合のつよき香に泌みにけ

愁思

菅原まさを

いつはりどうたがひいだく亂心のうらはかな  
げの子を棄てたまへ  
歡樂は春の夜のごとさざめきぬつづく愁ひの  
日を知らざれば  
默然と君は對しぬもの言はぬ敗者の胸の美く  
しきかな

懐古の情のせきあへず  
益荒武雄の夢の跡  
不滅のほまれ歌ふべく  
袂を別つ京城の朝  
大同江畔日はくれて  
夕風清し牡丹臺  
乙密臺の虫の音に  
はるかに忍ぶ友の上。

一日わくれて故郷の  
山むらさきに水きよき  
草の庵にかへりては  
熟睡むさぼる昨日今日  
ひそかに幸を祈りしを  
今朝初雁のおどづれに  
人は歡樂の盃に  
華燭の典をあげたりと。  
ああ新しき歡喜の  
胸に小琴のやらぐ時

若き希望にみたされて  
愛のひかりのどこしへに  
かはらぬ契り 青春の  
もゆる樂譜にのぼしては  
天津少女も天降り来て  
花環さゝげむ祝歌に。

蝙蝠 (募集句)

第三回發表

蝙蝠や早く灯す港口 羽 風選 秋  
蝙蝠や四條五條の夜店の灯  
蝙蝠や屑買戻る裏長屋  
蝙蝠の出る怪しき祠かな  
蝙蝠や月下に列す十二橋 楚 様  
蝙蝠やたちばな薫る寺の庭  
蝙蝠や山居の庵の軒近く  
蝙蝠や杏林暗き三日の月  
花桐に蝙蝠出たり古局 五 香  
蝙蝠や灯ともして着く川蒸氣

春園雜筆

(其四)

▲去來と能因と

去來と能因法師とについて、好一對の話がある。去來の句に「應々といへと叩くや雪の門」此意は或る雪の降つた晩に、誰か訪ねて、トン／＼門を叩くので、内から應々と返事をするけれども、なほトン／＼叩く、といふ意なので、鉢の木にも、餘りの大雪にて出す事も聞えぬげに咳」とある様に、非常に雪が降るところが聞えない、聲の滲れたと両方にかけてある。これに就て、俳諧蒙求にこんな話がある。去來が嵯峨に居つた時に此句が出来た、先生大得意、千古の絶唱だと思つた。雪でも降ればなほいゝ、何うか雪が降つてくれれば好いと思つて居ると。其日の夜になつて、大雪が降つて積雪一尺余もあつた。是はいゝと早速師友木節の宅を訪れて門を叩いたが、なかく聞けない、ウマイと内心愉快でたまらぬ、實はきこえぬ様に聞こえる様に、ちとアイマイに叩いたかも知れぬが、兎に角中に這入つてきて此句が出来たと出した處が、木節大に驚き手を打つこと數十、跳り上りて狂するが

蝙蝠や夜市の車引いて行く  
蝙蝠や潮満ち来る第一橋  
蝙蝠や場末の旗亭灯し覺  
蝙蝠や荒れて久しき無住寺  
灯のもれる鎮守の森や蚊喰鳥  
蕎麥賣の我家を出るや蚊喰鳥  
山賊の岩屋の跡や蚊喰鳥  
傾城の圍の灯に來る蚊喰鳥

天

蝙蝠や美酒の藏を鎖す頃

五 春

追 吟

蝙蝠や自炊の煙眼に痛き

社 告 第四回募集俳句次號  
誌上に發表す

如し。近來の耳を洗へり、絶唱々々と稱す。去來も自負して蕉翁死後此句を得て生前に耳を驚かさるること口惜しいといひき」といつてある。

これに能く似た話で此様なことが古今著聞集にある。それは「都をばかすひと共に出でしかど秋風ぞふく白川の關」といふ歌を、例の勘ね者の能因が得た時、どうもこれは都にゐて此様な歌を出しては一向面白くない、それよいゝ考があると「人にも知られず久しく籠りて、色を黒く日にあたりなぞして後」自分は陸奥の國へ、修業の序によんだのだと披露したといふことが載せてある。

今一つ例がある。これは師りのことであるが、こうだ、矢張り著聞集のうちにある。待賢門院の女房に、加賀といふ歌よみがあつた、それが「かねてより思ひしことよふし柴のこるばかりなるなげきせん」といふ歌をよんで居た、それが此儘出してはよくないといふので「同じくばさるべき人に言ひ契りて忘れたらんによみたらば、集などに入りたらんねもて優なるべしと思ひて」こんなことで、其後何うした結びの神の引合せか知らぬが、花園の大臣に申し込んだ、それが

遂に自分の思ひ通りになつたのであらう、それで右の歌をさしあげた處が、大臣は非常に可哀さうに思はれて、つひに千載集に編入せられた。それより伏柴の加賀といふやうになつた。

これ等は皆似た様な話ではあるが、去來のやり方は最も面白い罪のない話、能因は餘りの往らごでもいつてかいてもいゝが、加賀に至つては、如何に道の爲めとはいひ、自分の貞操を破つてまでとは、如何に時代の状態がかくまで陋卑にして、且和歌の勢力があつたとはいへ、女子としての面皮を欠ぐといはねばならない

▲十團子

「十團子も小粒になりぬ秋の風」といふ許六の句にもあるこの十團子といふのは、伊勢物語にある「駿河なる宇津の山へのうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけり」とある宇津の山のこと、其宇津の山の中に、宇津の冬峠といふがある、其峠の東方に茶店があつて、そこに名物の團子がある、それを十團子といつて居る。その團子をいつも十宛出したもので、ズット昔は其茶店の内儀が、團子器の中より掬ひあげると必ず十づゝある

瀟湘の野に遊びし碧雲

兄の歸郷を祝して歌へる

三 島 溪 雲

頰累たほき眞夏なり  
瀟湘兎學三句の  
異域の風に吹かれては  
自然の聲の清うして  
思をぞろに溢るるを。

夢はてしなき戦陣の  
ほまれ不滅のかゝやぎに  
盃冷えし手をのべて  
思をいたむ詞人に  
悲壯の巻は歌はれし。

情眞主どかかやげる  
ほこり上なき詩人なれ  
豪將征衣の袖朽ちて  
靈の宿れる野に立てば  
涙ぞれつればらゝと。

る、いや十づゝ入れてあげる、其手際が中々上手なので評番になつたらしい。それが十團子の十團子たる所以なのだ。

蓼花

森脇 桃村

ともすれば大濤襲ふ船の日も丹の頬して居し  
若さを思ふ

はの見しは夕靄せまる層樓に海見てねはす黒  
髪の人

秋の雨小さき音してそぼ降りぬ戀物語するか  
のやうに

小さき河塾の花散る野の中を流れぬたへすむ  
つがたりして

社告

平野萬里氏選纂樂歌「夏の海」  
は次號の誌上に發表すべし

本堂は杖四五本や秋彼岸

中は國旗の立つよ秋彼岸  
御彼岸の墓地に萩賣る女哉

○ 夏 山 繁

秋晴や早の實のとぶ存りなり  
黄苔を菱とる舟の遙かなり  
長き夜を障子にうつる人の影  
飼猫の團圓に這入る夜寒哉  
白木槿馬醫の看板古りに覺  
梶の葉の露新涼の灯のうつる

○ 五 香

雁鳴くや夜泊の舟に芦花白し  
朝寒や草戸川で行く納り賣  
朝寒の草に生れし蜻蛉かな  
朝寒や舟の烟の草に這ふ  
朝寒の山路に赤し蕎麥の莖  
虫の鳴く河原の暗やもの匂ひ  
虫鳴くや小野の小家の細灯  
虫鳴くや草の戸越の二日月

秋

○ 千 鳥 子

短夜のかごがましき女哉  
客來や新酒買ふべく山を出る

○ 松 葉

朝晴の彼岸詣や稻の風

百重波(しのめ會詩稿)

小村 香雨

海の風吹き入る樓の蚊帳越しに寝ながら仰ぐ夏の  
夜の月(以下稻佐にてうたへるうちに)  
ひく男波よする女波と抱き合ふやひひく戀の譜ね  
たしと聴く夜  
青潮のめぐる小島に苦屋してふたりし棲めは鷗も  
より來

三島 溪雲

よき人は八月かほる南風に白帆してまつよろこび  
の日を  
いつはりかあはれなる日をすがりては悪まぬ人を  
うらみて泣きぬ  
かゝる夜は忘れぬものの堪がてにむねこそ裂か  
ぬ人をし戀へば

梅原 梅窓

百重波鳥目眇目の世にあきし靈をみちびけ寥しの  
國へ  
雲湧いて人の心の垢膩すべてすくごどばかり夏の  
大雨

五点 川 蓼や染汁流す里紺屋 星 宇

四点 瀟車にして落雷の村通り覺 黒 潮

同 魚荷積む明石の瀟車や雷のなる 梅 窓

同 蟬いまだなかな氷室の山静か 同 窓

同 遠雷や葎切來鳴く杉の奥 同 窓

同 氷室守火串の人に訪はれけり 柳 宇

同 雷止んで再び聲す通夜堂 楓 葉

同 咲き残る櫻を貢げ氷室守 花 人

同 遠雷や既に雨打つ板庇 芦 仙

▲前號陽炎會投吟所及締切期日訂正○紅葉九月二十日

○寺(秋結)十月二十日○寒聲十一月廿日○新年雜詠一

月十日○切○幹事岡山市磨屋町四○富田武次郎(五香)

○投吟所同市上之町一○難波義直(梅窓)

寄贈新刊(重モナル分ハ巻頭)

▲ウカバ二の九▲菊見新誌五十一▲琵琶文壇四の五▲  
宇宙二の四▲若櫻二の八▲松の翠三の五▲若葉九▲あ  
かつき七の三▲明ほの四▲スラムシ一

草籠を追ひて花請ふ姫君が扱くをほゝるむ子が聖  
思ひ

福田 紫雲

初秋や五挺櫓たてゝ黄金の海をあさりぬ龍女も來  
よと

耳かたむけて虫の聲とふ幼なめく君に三五の月ほ  
のてりぬ

秋の夜や瞽者と手をひくそひ人のうたあはれみし  
濱のまちな

水馬會第四回(備前、岡山) 富田五香報

互選會を去月十六日富田五香庵に開く。出吟選者共十  
二名、運座輪講の後小宴を開き散す。二十八点五香二  
十点蛙佛星宇十八点梅窓柳盡旭水史十五点二牛黒潮芦  
仙以下略。 題。 蓼、雷 氷室、各五句出吟。

十二点 蓼の葉に蛭泳ぎよる澤邊哉 五香

六 点 雷や粟津は晴れて 雲の峰 同

同 夜べの雨汀の蓼を浸しけり 同

同 砂川の蓼に隠るゝ小蟹かな 蛙 佛

同 水や夜振に立ちし鳥や何 同

控、帳

▼雜誌記者にして匿名を冠り所謂六號活字の下に隠れ  
罵詈譏を逞ふするもの世間往々あり陋也と云ふべし  
▼内に熱烈なる同情を含めるものに在ては即ち可唯夫  
の一片の私情一時の誤解によりて筆を左右する者よ咄  
▼明星派三十五年頃の詩風を襲ひ以て新派歌人の名  
を潜稱する者少からず吾人は臂頭第一金子薫園を擧ぐ  
▼吾人は金子薫園を擧ぎ上る人々をも併せ否認す蓋し  
詩を論じ詩を作る資格なき者の多く薫園に馳すれば也  
▼社友西枯萩詩を作らざること既に半歳を過ぐ而して  
自ら今の詩風に後れたりと云ふと雖も固より是謙遜也  
▼謙遜と自重とは文士の美德なり誌上掲載の順序を前  
後したるの故を以て編輯局に喰って懸るの輩顧り見よ  
▼枯萩氏と共に吾人の推服せるを碧雲七星二氏となす  
今の虚名に過り去就定まらざる多數文士以て奈何と爲  
▼英詩人米野日君歸朝夕々詩集出版に於て大ボロをさ  
らけ出す真に笑ふべき哉謙遜自重の徳吾人重て之を云  
▼夏目瀨石氏吾輩の猫と坊ツちやんとを以て名聲太だ  
舉る如斯しく我が大日本の文壇は富分太平無事ならむ



● 廣 告 ●

銀鈴創刊 紀念繪葉書 四枚壹組 實價五錢 郵稅貳錢

銀鈴の欄畫に用ゐたるものを印刷に附し天馬、春光、清韻、愛美を四枚壹組とし諸子の愛玩を待てり。紙質色彩固より特に誇るべからずとすと雖も亦一掬の趣致なくんばあらず

銀鈴社

煙草專賣局 事務官補 伊藤鏢三郎著

煙草論大意

定價金貳拾八錢 郵稅金四錢

本書は煙草事業上に於ける一切の作業施設を網羅し煙草專賣法規の要領を説明し簡明平易を主として行文亦流暢明快をれば何人にも理會し易く煙草專賣吏員の良參考書農學校の教科書として適當なるのみならず煙草業者に取りても頗る有益にして其他煙草業を知らんとする者には了好の指南車にして必讀すへき良書なり

岩代須賀川町 發行所 開駢堂 橋本 太平 發賣所 全 無限思潮社

銀鈴第拾六號(毎月一回二十日發行) 明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可 明治三十九年十月十日發行

文學雜誌 曉 會費一ヶ月四錢半々年分貳拾參錢 一ヶ年分四拾四錢切手代用五厘券 ニテ必ス一割増

發行所 岐阜縣惠那郡付知門前町 少年文會

月刊 スズムシ 三部拾五錢六部貳拾八錢 拾貳部五拾九錢見本五錢 送レ

發行所 岐阜縣可兒郡上之郷村謠坂硯友社

銀鈴定價表	
一部	金五錢
六部	金參拾錢
十二部	金五拾五錢
一部	金五厘
六部	金五厘
十二部	金五厘

一行五號活字二十四字 貳拾錢半頁貳圓 郵券代用壹割増

明治三十九年十月八日印刷 年十月十日發行

銀鈴第拾六號

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三二 編輯兼發行人 河野岩雄 全縣全郡川本村大字川本五三八 印刷人 原八太郎 全縣全郡全村大字全五三八 印刷所 邑智活版所 石見國邑智郡田所村 發行所 銀鈴社